



ラベンダー

神よりも 主 と呼ぶことが多く、それは神を身近に感じられる自然な形だったのではないのでしょうか。150 編は 神 と呼び、格調高く民に命じて、最後に再び 主 と、愛の溢れる形に収まっています。

聖所で神を賛美せよ。大空の磐で神を賛美せよ。(1) とあるように、聖所、即ち、地に生きるすべての人々は、礼拝の場として与えられた神殿や集会などで、賛美せよ、また 大空の磐、即ち、手の届かないほどの大自然に生かされているすべてのものは、そこで、賛美せよと命じられています。

力強い御業のゆえに神を賛美せよ。大きな御力のゆえに神を賛美せよ。(2) 数え上げることができないほどの多くの、また、いかに多く助けられたか分からないほどの神の働きを賛美せよと命じられています。

角笛を吹いて／琴と豎琴を奏でて／太鼓に合わせて／踊りながら／弦をかき鳴らし／笛を吹いて／シンバルを鳴らし／シンバルを響かせて 神を賛美せよ。(3-5) と、様々な楽器が賛美に用いられています。

更に踊りも賛美の形です。踊りといえば、出エジプトが叶った時、アロンの姉である女預言者ミリアムが小太鼓を手にとると、他の女たちも小太鼓を手を持ち、踊りながら彼女の後に続いた(出エ 15:20) や、ペリシテ人に奪われ、戦乱に明



ミリアム Loganovsky (救世主ハリスト大聖堂 1849)

け暮れ、顧みられていなかった主の箱を、王位に着くとすぐにエルサレムに運んだ時、主の御前でダビデは力のかぎり踊った。(サム下 6:14) など、全身全霊を捧げる姿として描かれています。

最後に 息あるものはこぞって主を賛美せよ。ハレルヤ。(6) と、詩編を締めくくっています。命あるものすべてが歡喜、感謝をすべての方法で表現しようとしていると感じます。

『讚美歌 21』は 172「ハレルヤ、うたえ」 <https://sanbika.blog.ss-blog.jp/2013-01-20> で、ジユネーブ詩編を採用しています。そのほかに 39「ハレルヤ」は、中世のグレゴリオ聖歌 <https://sanbika.blog.ss-blog.jp/2012-07-13> や、現代のアメリカ先住民民謡 <https://sanbika.blog.ss-blog.jp/2012-07-19> による「ハレルヤ」など 7 曲の応答唱を挙げています。応答唱は対話性・応答性の豊かな礼拝を捧げるための賛歌です。詩編が歌われた時代の楽器で、その時代の音楽で賛美できるように研究がなされていると聞いています。

ジユネーブ詩編歌はリュートと、爽快な変奏によるリコーダーの重奏で、朗々たる賛歌です。

<https://www.youtube.com/watch?v=OXhRiezYNao&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=150>